

経営のヒント196 要素還元主義からホーリズムへ」

要素還元からホーリズムへ

これまで我々は、要素還元主義からのアプローチによって産業や経済、社会的なインフラを大きく発展させてきた。

西洋医学は臓器ごとに専門が分かれているが、このように物事を部分でとらえたほうが取り組みやすく、また効率もよい。

ウィリアム・ショックレーの言葉を借りれば、基礎研究から応用化・実用化までのスピードが格段に速まったのである。

しかし、要素還元主義だけですべてが解決できるわけではなく、自ずと限界がある。

例えば、真空管がそうであった。

1940年代までに大きな功績を残したことは事実だが、真空管にまつわる研究をどれほど細分化しても、それ以上要素還元主義的なアプローチを推し進めても、トランジスタという革命的なイノベーションは生まれなかった。

閉鎖状態から脱したきっかけは、ホーリズムのアプローチを取り入れたことにある。

これによって、1950年代にはトランジスタや集積回路などのさまざまな技術革新が成し遂げられた。

ホーリズムはオーケストラに例えられる。

オーケストラは、管楽器や弦楽器一つひとつの音色の良さを超えて、全体としてよいハーモニーを奏でることが出来た時にすばらしいものとなる。

つまり、全体をひとつのものとし、他社との関係性を考え直すことなのだ。

全体から物事をとらえることは、イノベーションの促進のみならず、環境に適応していく上でも欠かせない。

我々はこれまで、要素還元主義のアプローチでさまざまな功績を収めてきたがゆえに、つい、同じアプローチで成功にあずかろうとしてしまう

だからこそ、その限界や落とし穴を心にとめなければならない。

企業経営も同様に、分業を旨として発展してきた経緯がある。

ここにホーリズムの視点を取り入れることで、企業経営に新たなイノベーションが生まれるはずである。

DHBR 第 25巻 6号 「要素還元主義からホーリズムへ」江崎玲於奈より参照

<経営のヒント>

ホーリズム (統合 融合) の視点の一つ目は「全体への知的好奇心」を持つこと

そして二つ目は「全体への知的統合力」

部分最適ではなく、全体最適。

還元ではなく、統合であり融合の力。

つまり、問題を全体として「洞察する力」、その問題を部分に置き、さらなる全体を俯瞰し構想する力がなければならない。

よって、今後の医療の世界は、高齢化と共に病院 (治療の場) から地域 (生活の場) へと視野を広げながら、治療から保険へと比重を移していくことでしょう。

企業も、もはや対症療法的な業務改善ではなく、飛躍的体質強化・体力増進を先取りする経営変革の時代です。